令和6年度 太田市美術館・図書館運営委員会 摘録

◆日時 令和7年1月23日（木）午前10時30分～午後12時45分

◆会場 太田市美術館・図書館 3階視聴覚ホール

◆出席者

【委員】 尾崎委員長、川上委員、杉浦委員、染谷委員、鳥塚委員、花井委員、森委員
※杉浦・鳥塚・花井委員についてはオンライン参加

【事務局】 高橋館長、桑原館長補佐（管理係長）、瀬古係長（学芸係長）、池上係長代理、山田係長代理、増田主任、矢ヶ崎主任学芸員

◆議題 ①令和5年度・令和6年度（中間）事業報告について
②令和7年度事業計画について
③その他

◆配布資料

- ・ 会議次第
- ・ 委員名簿
- ・ （資料1）令和5年度・令和6年度（中間）太田市美術館・図書館事業報告
- ・ （別冊1）「どうぶつ と はなし — 大曾根俊輔 乾漆彫刻展」事業報告書
- ・ （別冊2）「本と美術の展覧会 vol.5 あふれる、うごめく、のめりこむ。—絵本原画とアートの空間—」事業報告書
- ・ （別冊3）「太田の美術 vol.5 赭土でつながる—大槻三好・正田二郎・正田壤—」
- ・ （別冊4）令和6年度図書館イベント報告書
- ・ （資料2）令和7年度太田市美術館・図書館事業計画（案）
- ・ （資料3）令和7年度美術館・図書館事業カレンダー（案）

◆会議の内容

1. 開会
2. 挨拶
3. 議題

議題① 令和5年度・令和6年度（中間）事業報告について

事務局が資料1、別冊1、別冊2、別冊3、別冊4に基づき説明を行った。

（委員）

展覧会をしてないときに何回か館にお伺いする機会があって、図書館や企画コーナーを見たり、館の様子を拝見してお茶をしたりということをして2回くらいさせていただいた。展覧会は残念ながら拝見できていなくて申し訳なかった。すごく広報を丁寧にしていただいたので、館の様子も分かったし、コロナが明けてから来館者数や、プログラムの質もすごく頑張って上げていて、良い形で運営されているなと思ってご報告を聞いていた。

私も運営委員ということで、とくに運営面を見ると、利用者からはほとんどがいい声だったけれど、そうではない声もあったとのこと。それについて対応されたということだが、なぜそういう声が出たかの検証も重要と思っている。例えばさきほど看視の話があって、すでに改善にかかっているという

ことだった。逆に看視の方から看視中の出来事に対して、実はこうだったからそうってしまった、といった理由について説明はあったか。

(事務局)

看視スタッフには、事前に看視マニュアルに基づいて、展覧会概要説明、看視上の注意点や声かけの仕方をレクチャーしている。皆さんがお声かけしたあとも観覧者が気持ちよく展覧会をご覧いただけるよう配慮してくださいとお願いしている。

(委員)

ここの看視員の方たちは外部への業務委託か。

(事務局)

はい。

(委員)

別組織で動いているということなので、何か起こったときの責任を取る契約の仕方にもよると思うが、自館で看視スタッフを抱えるか、または外部に委託するかで、看視スタッフの動き方が全然変わってくる。今のように丁寧にやり取りされているのはすごくいいと思った。

昨今、マネジメントについての講義でも、心理的安全性をすごく重視している。安心して業務委託の方でも働けるようにすることが肝要と思う。業務委託先の会社と市の関係性とか、どういう契約を結んでいるのかまではわからないけれども、そのあたりが看視員の動きにも出てくる可能性があるし、看視員一人一人の人生も看視の際の言葉かけひとつに出てくると思うので、そのあたりを伺った。

それと、あかちゃんのプログラムについて、「どうぶつとはなし」と「本と美術の展覧会 vol. 5」の報告書の方には、あかちゃん向けのプログラムの記載がなかったが、子ども向けのプログラムの方は記載があった。公式な報告書だとすれば、今後も続けるなら記載を残しておいた方がいいと思う。

乳児から幼児を対象としたプログラムについて話をしてほしいという要望を、茅野市美術館や国分寺市、滋賀県立美術館など、各所から多く受けている。ご高齢の方向けの要望もあるが、自治体の方で子どもたちへの意識がすごく上がってきていると感じている。

先ほどあかちゃんのプログラムが1回しか集まらなかったとのことだが、これについて「広報おおた」に載せているのかどうかを知りたいと思った。あと去年は猛暑で、実施日の7月31日はかなり暑くなる時期なので、展覧会の内容というより環境要因も大きいと思う。気候、情報が届いているのかなど、内容とは別の要因があると思うので、くじけずに続けていただければと思う。それでも8月中旬に行われた図書館のプログラムに人が集まっていた素晴らしいなと思った。

(事務局)

広報おおたには掲載をしたけれども、残念ながらということだった。暑さもかなり厳しいものがあったので、その影響も考えられるかと思う。

(委員)

「広報おおた」に載ったと報告書にみあたらなかったの。私が見落としていたかもしれない。

(事務局)

太田の美術 vol. 5 の評価書の 2-3 ページ目に広報の欄があるが、広報おおたは毎回掲載をしていることもあり、こちらにとくに記載をしていなかった。今後は記載をするようにしたい。

(委員)

一番最後のページを先に見たので、そちらに記載したら良いのではと思う。

(事務局)

次回からそのようにする。

(委員)

あと、夏のおはなし会の件でさきほど話があったが、素晴らしいと思う。参加人数を 15 組から 12 組

に減らす、というお話があったが、できれば減らさない方がいいと思っている。可能かどうかかわからないが、例えば15組で11時から11時45分に1回行っているところ、10時から10時45分を追加して、そこまで実施に気合いを入れず、10組×2回で20組などどうだろうか。人気なので2回に分けて行うということができないかなと思った。

(事務局)

季節のおはなし会として年に3回行っている。冬のおはなし会ではサンタさんも登場するなど通常時よりかなり準備をして、人数もかかるので毎回15組でやらせていただいている。装飾にも時間を割いているところなので、2つに分けるとなると規模を縮小して行うようになるかもしれない。

(委員)

冬ではなく、夏の方のおはなし会の人数を減らすかどうかについてお話しした。夏のおはなし会と同じセティングで10時から10時45分、11時から11時45分に2回、同じ条件でうまくできたら2回で20組になるという意図だった。無理だったら全然いいのだが、できるのではないかなと思ったので。

すでにセットしてあるので、同じセットを使って、10時スタートと11時スタートの2回に分けるなどすれば、参加できる子どもたちを減らさずに、というよりむしろ増やせる。そのようなことができるか。プログラムの内容と参加者の意欲を掛け合わせたときのデザインとして可能かなと思った。

(事務局)

かなりの数の問い合わせや申し込みを受けているので、2回開催ができるか図書スタッフと検証したい。

(委員)

私の方から先ほど報告があった展覧会についての感想をすこしお話ししたい。最初の大曾根さんの動物を扱った展示、やはり子どもたちにも大変人気で、たくさんの来場者があるだろうという予測はしたけれども、実際にそうだった。とくに北の杜学園との連携、それからこれは地元の人間でないとなかなかわからないが、ジャパンスネークセンターというかつて非常に賑わった施設、そことの連携も含めて扱ったこと。そして子どもたちの展示を3階に並べて、一つ一つ見ると未完なのだけれども、逆に非常に面白く、私も興味深く見た。それぞれの構成というか、考え方が出て、非常に面白い展示だと思った。

展示内容との連携というのはなかなか難しいかもしれないけれども、ぜひ機会を見つけて、教育委員会、それから市内の他の施設との連携もうまく計りながらやっていくといいのかなと思う。それから単に来館者が多かったというだけでなく、子どもたちが参加したことで、多分その家族やその関連の人たち、これまで美術館に足を運ばなかった人たちも多く来たのではないかな。そのことが入場者数に繋がったのだろうと思う。

それから次の本と美術の展覧会 vol.5 について、過去にポーニャの展示をやっていて、私も個人的に大変楽しみにしていた。今回は3人の絵本作家のグループでやったことがそれまでの展示と違ってダイナミックな展示ができて、非常に興味深く拝見した。

それから赭土の会の展示については、ちょっと申し訳ないけれども、多分地味でなかなか来館者も少ないのかなと。中村節也展もそうなのだが、この美術館でするには全体的になんというか古い。大概三好や正田二郎ははっきり言ってかなり昔の人で、私もよく知らないくらいだ。ただ、新しく寄贈になった正田壤、その幼少期の説明であるとか、あるいは正田二郎の手紙のこととか、これは非常にいい調査研究だった。とくに解説冊子をポケットブックで配布されたというのは、鑑賞のいい手助けになったと思う。

正田壤さんは前もお話ししたように、戦前から出発して、本人もよく「俺の師匠は福田貂太郎と松本忠義と山口薫だ」と常にその3人を挙げていたけれども、その3人とどういう繋がりなのか、その詳細が手紙や展示からよくわかって、私も腑に落ちたところだ。また機会があるごとに、100周年などでやってもいいのかなと思う。今回は大槻三好・正田二郎・正田壤と3人でのバランスを考えて、正田壤の作品をもっと見たいという要望があっても、なかなかできない事情もあったかもしれない。けれども、ぜひ生誕100周年くらいのときには作品も増やして、もう1回幼少期の作品やスケッチなど、たくさん見ていただける機会が取れるといいなと強く思う。

(委員)

展示について簡単に感想を述べさせてもらう。展覧会はすべて見ることができた。大曾根さんの動物の展示も、絵本原画の展示もこの美術館らしい面白い展覧会で、特色がよく出ていたと思う。

3つ目の赭土を巡るテーマに関して、私は戦前の美術を研究しているので、個人的には非常に面白く、よくぞやってくれたという思いがある。ただ、ずいぶん地味な展覧会で、大丈夫だろうかと心配していたところで、結果も中村節也展ほどはいかなかったとのこと。中村節也展も決して多い数ではなかったのに、さらに地味な展覧会であったかなと思う。

しかし、地元太田の美術の戦前の状況を調査するという仕事は多分ここでしかできない、太田市の美術館でしかできないことだと思うので、3~4年に1回くらいはこういう地味なのが混ざってもいいのではないかと期待を持っていたが、そういうことはどうやらなかったとのこと。その辺はやや広報が足りなかったのか、もっと積極的に「正田二郎の作品をお持ちでないですか」など、所蔵を問い合わせることがあってもよかった。ただ、一度やっておくと、これをきっかけにここに問い合わせが来る、また新たな情報が集まってくると思うので、地味な企画ではあったが、やっていただいたのは大変ありがたかった。

(委員)

地味な企画とあったけれど、個人的にはすごく面白い美術展だった。スケッチに書かれた「赭土」から色々なアプローチをして、色々な系を探っていく。その系はほとんど切れてしまうのだけど、企画展の意図がすごく感じられて面白かった。

(委員)

私の後輩で高校の同窓会の幹事をしている人がいて、本人も展覧会で絵を描いたり、非常に美術に関心のある人なのだけれど、彼が言うには「この展覧会は自分が観た展覧会で一番面白かった」と。そんな感想があったということも併せて報告しておきたい。

(委員)

図書館イベントが8つあり、素晴らしいと思う。いま色々なところで読書離れが叫ばれていて、子どもたちの学力も問題になっている。本を読んでいるお子さんは学力が高いというのが、学力学習状況調査というアンケート結果でも出ている。ぜひ、子どもたちが図書館に興味を持ち、行ってみようと思うようなイベントをこれからもやっていただけるとありがたい。年配の方の参加も目立つといった報告もよかった。

そして、5つ目の「デュークポッポからの挑戦状」というのを非常に興味関心を持って聞かせていただいた。事前申し込みがなく、参加者を待っている状態というのはすごくドキドキすると思うが、たくさんの方の参加を得られたということが素晴らしい。あとその内容について、本を読んで調べる楽しさがテーマということだが、物語を読むときに登場人物の識別というのはものすごく重要なことであり、それに関わっている企画の内容が素晴らしいと思った。読解力を高めるのに、登場人物を識別するというのが非常に大事になってくる。そういうところをゲーム感覚でやりながら、子どもたちが興味関心を持ってくれたというところが、これからの子どもたちの読書意欲や読解力の向上につながっていく、そう思いながら聞いていた。

(委員)

いま委員がおっしゃった「デュークポッポからの挑戦状」はすごく面白い企画で、私どもの団体でも何かに活かしたら面白いと思っている。今年JBBYが50周年記念だったので、色々なところで大きいイベントを行った。きっちり時間を決めてその時間帯だけ来られる人を集めてやるのもとても大事なことだが、やはり一番大事なのは来てくれる子がどれだけ楽しめるか、気持ちよく面白かったと思って帰ってくれるのかだ。難しいのはわかるが、なるべく臨機応変な形で子どもにお話をしてあげるとか、さきほど杉浦委員がおっしゃったような、子どもがいっぱい来たら回数1回のところを2回に増やして、もっと大勢の子が参加できるような形にしてあげることが重要。スタッフが本当に大変なのはよくわかるけれども、その場その場で自由に動けるような、そういうフリーな空間に図書館がなっていたらいいと思う。

(事務局)

貴重なご意見をいただいた。はじめに美術に関してだが、太田の美術シリーズは地味ではないかというご心配もいただきながら、その中でも評価していただいた。このシリーズについては、太田市にある美術館としての役割と考えている。人数でいうとどうしても著名な絵本作家の展覧会に比べて、来館者数が少なくなってしまう。アンケートの結果にもあるように、市外・県外の方の割合が減ってしまうが、それでもこの美術館では開催すべき役割があり、市の収蔵作品を紹介する機会、学芸員の研究成果を発表する機会、というところで見えていただくと面白い展覧会になっていたかと思う。皆さんからご意見いただいたとおりなので、必ずしも毎回3,000~4,000人の観覧者を狙うということはず、すこし観覧者数は落ちるかもしれないが、ぜひ見ていただきたい美術館・図書館ならではの展覧会というところも考慮に入れたい。観覧者数については、例えば年間で一定数に行くように、もしくは1~2年計画の中でバランスが取れるように、というふうにしていきたい。

図書について。ご意見いただいた夏のおはなし会では、1回のおはなし会にしてはちょっと人数が多すぎたのではないかという報告をした。この会はすごく準備をし、楽しんでいただけるような工夫、色々な飾り付けをしている。私ももったいないなと感じており、できるだけ見たい方がたくさん見れるような工夫が必要で、考えていきたいと思う。美術館・図書館、複合施設ならではのところはいつも考えているので、事業計画について皆さまにご意見をいただきながらやっていきたい。

(委員)

展覧会の中で看視に関するクレームがあったという。

また、同じ展覧会の中で照明器具が足らなかったという記載があったが、その辺の手当は考えているのか。

(事務局)

看視についてはご指摘のとおりで、鑑賞体験に直結してくるので大事な問題と捉えている。実際に対応する看視スタッフに、どのように肝要な点を伝えるか、現場で臨機応変に対応していただくために、こちらがどう準備するかは常に意識している。

照明について現状をお話しさせていただく。展示室1と2、スロープ、展示室3があるが、各展示室で使える照明の数が決まっていて、システム上で設定がされているので、追加で増やすことができない。増やすにはシステム自体を変える必要が出てくる。照明は鑑賞体験と直結している大事な要素だが、いまのところ改善の予定はないというのが、当館の照明設備の現状である。

(委員)

先ほど観覧者数は気にしない、それよりは内容を重視するという回答があって、私はそのとおりだなと考えている。

その中で思うのは、もうすこしチャレンジをされた方がいいのかな、と。前回の会議でもお話しさせてもらったが、創造的太田人という理念があるものの、まず何の企画を持ってくるかというところが足りていない。

図書館からの目線だと、子どもたちに対する大変ユニークなイベントをして、おはなし会もたくさんして、Facebookを見ても企画がアップされていて、私もいつもいいねを押させてもらっている。しかし、蔵書の中で最初に私たちが選んだもの、運営の中でこういうものを使ったらどうでしょうと皆さんに提示した蔵書という観点からから見ると、アートとか建築とか映像とか、多岐にわたる生涯学習の資料がたくさん蔵書されているが、その点に関して企画力が薄いのではないかと。とくに平田晃久さんという、いま建築界でかなりユニークなことをしている設計者が手がけた建物の中で、建築のことを全然語らないのは、どういうものかと思ってしまう。

色々な建築家がいるし、私のネットワークでもたくさんの建築家がいるので、紹介することも可能だ。そういう人たちを招いて群馬または太田という目線から建築を語るだけでもいい。お子さん向けのイベントもそれはそれでいいのだけど、そういう興味を持たれている方、大人に向けた生涯学習的なイベントが少ないと感じている。

それと合わせて、なぜそうなるのかと考えると、専門的とまではいわずとも、そもそもそういう方面に興味を持っているスタッフが少ないか、いないのかと思う。お子さんへの興味は大変持っているが、建築や映像とか、アートも含めて、そういうものに興味を持って、企画に構成していこうというパッションを持っているスタッフがいるのかな、という疑問を持った。今後はそういう人たちが採用基準になってくると嬉しい。

それと、企画が偏っている原因は、図書館のスタッフミーティングの中でどういう会話がされてい

るかにあるのではないか、という疑問を持っている。パッと見てわかると思うが、言い方はちょっと悪いけれど、どこの図書館でもやっているような読みきかせだったり、子ども向けのイベントをやっている。やっぱり太田だよねって言われるような企画、運営力が乏しい。そこを改善する余地がある。

最後にもうひとつ、美術館ではアンケートをとっているが、図書館でアンケートをとって次にこんなイベントをしてほしいとか、こんなところがよかったとか悪かったとか、そういうアンケート調査はされているか。していなかったら、今後はそういうアンケート調査も欲しい。また、もっと言えば図書館だけではなくて、図書館の周辺、太田市にいらっしゃる方へのアンケートをしたらどうか。もう間もなく開館から10年経つ。それに向けて図書館を利用しているか、なぜ利用しないのかということも含めて、ターゲットをどこに置いて、どういう運営をこれから10年先やっていくのか、そろそろ思案しておいていい時期だ。

(事務局)

図書の方では児童、小さいお子さんを持つ親子向けのイベントに偏っているところもある。大人向けの事業としては、視聴覚事業でえきまえ寄席や月末名画座は工夫して力を入れている。図書事業についても大人向けや中高生向けの図書を企画コーナーで展示することはあるが、イベントでも何かできるか、図書スタッフと交えて考えていきたい。

それからアンケートについて、先ほどの視聴覚事業のほか、図書イベントでも毎回感想や参加者の年代、今後どういったものだったら参加してみたいかというアンケートは取っている。それを参考にしたイベント等も行っているところだが、内容も取り入れられるものは積極的に取り入れてまいりたい。

スタッフミーティングは月に1回、館内ミーティングで図書の担当と学芸係長も交えて全体で行い、図書イベントの前後にも行っている。そういうところで出たアイデア等も採用できるように取り組んでまいりたい。

(事務局)

観覧者数については実はすごく気にしている。ただ、美術展に関しては観覧者数だけではないというところも評価いただいたので、そのように思う。

来館者数を増やしていきたい思いはあるが、来ていただけるターゲットを狙うとなると、親子連れがどうしても普段からたくさん来ている層であり、そちらを向いたイベントが現状多くなっている。委員の方から言われた指摘はそのとおりであり、今後、運営にきちんと活かしていきたい。

議題② 令和7年度事業計画について

事務局が資料2、資料3に基づき説明を行った。

(委員)

カフェについてだが、私は毎回こちらに伺ったときには必ずカフェを使っていて、カフェの様子も見ています。ただ、一日中いたことがなく、伺うのがだいたい午後遅く夕方にかけてなので、その時間帯のお客さんの様子しかわからないのだが、カフェに魅力を感じてる方が多いと思う。

なので、カフェイベントのポテンシャルはとても高いと思う。展覧会や図書館とのイベントやコラボメニューなど、どこまでできるかはわからないが、「映え」という言葉もだいぶ落ちてきているが、インスタなどに関心を持つ人もまだまだいるし、若い人に来てもらう意味でカフェはすごく重要。夕方カフェで勉強している高校生や、お話ししている人たちがすごく大切だと思う。カフェが1階にあるのはすごく魅力だと思うので、いい効果が生まれるといい。

(委員)

先ほど大人向けのイベントが薄いというお話が出た。ぜひ考えていただきたいのが、小学校低学年の保護者に図書館に来ていただいて本を紹介してもらったりとか、集まった人と一冊の本をもとに話し合ったり、自分の子育てを見つめ直すとか、そういう企画はどうだろうか。というのも、いまの1年生2年生の保護者は、子育てに対する悩みを持っている方がすごく多い。もちろんスマホで調べても色々な情報は手に入るが、ぜひ図書を通して何か考えられるといいのかなと、さきほどのお話を聞いて思った。

(委員)

大変よいと思う。賛成だし、さきほども申し上げたが、お子さんへのサービスがかなり充実してきている中で、もう少し大人向けに、多角的に展開してほしい。委員がおっしゃったように、いまは情報過多になっている時代だ。それを整理する役割として、図書館にある本や資料から、大人の生涯学習に向けて、色々なシェアを考えてもいい。

もし例えばというのがあれば、私の方からも提出することは可能と思う。私もけっこう東京には行っているのだが、太田に伺っていなかったので、今年は足繫く太田に行きたいと思っている。

議題③ その他

(特になし)

4. 閉会